

TruPhase の追加導入(5)
—CD の位相チェック(2)—

1. はじめに

前報(4)に引き続き、CD の位相チェックを行っていきます。

2. TruPhase の試聴方法

前報(2)で報告した EMT981 のシステムで CD 再生を実施し、音質と位相反転の効果を確認します。接続やボリュームの設定あるいはアクセサリーの追加は前報(2)のとおりです。

試聴する音源は、[音源の位相チェック実験\(24\)](#)と[位相チェック実験\(25\)](#)と[位相チェック実験\(26\)](#)で使用した CD から選抜した下記の CD です。

PHILIPS PHCP-9089~90

J.S.Bach チェロ組曲
モーリス・ジャンドロン(チェロ)

PHILIPS PHCP-11057

J.S.Bach 無伴奏チェロ組曲 1 番・2 番・3 番
今井信子(ヴィオラ)

ACCENT ACC24196

J.S.Bach 無伴奏チェロ組曲 1 番・2 番・3 番
Gigiswald Kuijken(肩掛けチェロ)

MERCURY (DECCA) SSHRS-011/014

J.S.Bach 無伴奏チェロ組曲全曲
ヤノーシュ・シュタルケル(チェロ)

EMI TOCE-8641-42

J.S.Bach 無伴奏チェロ組曲全曲
ムステイスラフ・ロストロポーヴィッチ(チェロ)

Deutsche Grammophon(ユニヴァーサルミュージック) POCG10243/4

J.S.Bach 無伴奏チェロ組曲全曲
ミッシェル・マイスキー(チェロ)

以上のうち、録音年代からみてジャンドロンとシュタルケルはアナログマスター時代のものであり、その他はデジタルマスターのようです。

位相チェック実験(24)と位相チェック実験(25)と位相チェック実験(26)とでは、Brooklyn DAC+の位相反転機能を使用していますが、今回は、TruPhaseB の位相反

転機能を使用し、前報(2)の手順に従って音量調整を行いながら位相反転を行いつつ試聴していきます。

3. TruPhase の試聴結果

ジャンドロンは、1964年の録音で、マスターが同じと思われるアナログ盤もあります。TruPhase Bで位相反転させますと、広がり感がでて音が散漫になり、定位がぼやけます。即ち PHILIPS レーベルのアナログ盤と同様、正相のようで、音質もアナログ盤の音質に類似しています。

今井信子は、1997年の録音で、チェロの曲のヴィオラによる演奏です。TruPhase Bで位相反転させますと、広がり感がでて音が散漫になり、定位がぼやけます。ヴィオラによる演奏ですので、音域の違いは当然としてボウイングの様子も違ってきます。

Kuijken は、2006年～2007年の録音で、violoncello da spalla と称する肩掛け型のチェロの演奏であり、実際に演奏会で聴いてきました。TruPhase Bで位相反転させますと、広がり感がでて音が散漫になり、定位がぼやけます。通常のチェロと違ってサイズが小さく、低域の胴鳴りの豊かさなどが後退している様子など、演奏会の印象が戻ってきました。



シュタルケルは、1963年と1965年の録音で、他にもステレオサウンド社の11.2MHzDSDがあります。TruPhase Bで位相反転させますと、散漫な音が中央に凝縮し、定位がしっかりしてきます。音質はアナログ的です。

ロストロポーヴィチは、1965年の録音です。TruPhase Bで位相反転させますと、広がり感がでて音が散漫になり、定位がぼやけます。音質的にはデジタル臭さはなく、演奏スタイルはロストロポーヴィチ節が躍如です。

マイルスキーは、1999年の録音です。TruPhase Bで位相反転させますと、広がり感がでて音が散漫になり、定位がぼやけます。音質に的はディテールの描写に優れ、演奏スタイルはマイルスキー節とも言える個性的なものです。

上記の1960年代のジャンドロンとシュタルケルに対し、ロストロポーヴィチとマイルスキーは、いかにも現代の演奏といった印象で、時代により演奏スタイルの違いも分かり

ます。また、通常のチェロの演奏と違った、ヴィオラや肩掛け型のチェロの演奏の表現の様子もよく分かりました。

4. まとめ

録音年代やレーベルによる位相反転の効果を十分に認識できました。音質的には、**XRL** リベラメンテやヴォリュームアキュライザーの効果で、アナログマスター時代の CD と最近のデジタルマスターの違いもよく分かり、それぞれの魅力があります。

以上